

万博都市パリの光と影

高木 勇 夫

人間社会科学講座

(1997年8月29日受理)

Expositions and Physical Culture in 19th Century Paris

Isao TAKAGI

Department of Humanities and Social Sciences

(Received August 29, 1997)

E. G. Robert alias Robertson, a Belgian physicist, brought his *fantasmagorie* (groaning phantom) to France in the 1790's. At the same time the *panorama*, imported from England by R. Fulton, an American citizen, satisfied the infatigable curiosity of Parisiens with its bird's-eye view of memorable sites. Its greatest contender was the *diorama*, invented by J. Daguerre who promoted the *daguerréotype* afterward. No more than an illusion on a vacant screen, these offered surely the vision of nature and human activities.

Ever since popular theaters showed up in Paris, dramaturgy and mechanical devices developed into a general interest of Europe. Grand opera, opera-comique, *mélodrame* (an emotional stage-play), *féerie* (a sort of fantasy), and *parade* (a short conte played in front of the theater) had competed with the classical plays. Acrobatics, tightrope, circus, magic, and gymnastics gained public favor as well. Such popular physical culture on the *boulevards* was attained to perfection in the 1830's under the July Monarchy.

While French industrial expositions were held in every few years from 1798, the World Exhibition was given by Londoners in 1851. The British Empire of merchandise seemed to overpower the other countries. Only France responded to it with the *Exposition universel* in 1855. The 1867 Expo, the second one in Paris, realized the saint-simonian belief and originated a new style of display. A gigantic ellipsoid covered the *champs de mars*, and the numerous passages radiated from the center, an art corner, to the circumference, industry sections.

This physical culture could transfused its enthusiasm for body actions into the successive Expos in Paris. In 1889, for example, the Wild West Show led by 'Buffalo Bill', won great applause. The sixth and final Expo in Paris of 1937 failed to achieve a massive involvement in the festival. After World War II, there were demands for such events in the mid 1980's, but no progress at all toward the 1989 Expo. France could however afford quite retrospective events for the centennial of Eiffel Tower and the bicentennial of Revolution.

目次

初めに	博覧会と身体文化
1	万国博と「自然の支配」
2	帝国・商品・娯楽
3	パリの万国博遺跡
結びに代えて	愛知の博覧会

初めに 博覧会と身体文化

19世紀初頭のパリでは、ロバートソンのファンタスマゴリー⁽¹⁾が人気を集めていた。ロバートソンは本名をエチエンヌ・ガスパール・ロベールというベルギー人で、革命のさなかにパリにのぼり、巨大反射鏡のアイデアを共和国政府に売りこんだという。軍艦といえども木製だった時代のこと、古代のアルキメデスよろしく、それでもって敵国艦隊を燃やそうというのだ。彼は気球の開発にも名を残したまっとうな物理学者なのだが、興行師のような一面もあわせもっていた。ファンタスマゴリーとは、革命期に散った有名人の似姿を映し出す一種の幻灯だったに違いない。ロバートソンはそれに新機軸を加えて、観客の前に亡霊たちが訴えるような仕草をしながら、かつ現われ、かつ消えたという。

同種の仕掛としては単純ながら、「俯瞰する眼差し」を庶民に提供して、より長く愛好されたのがパノラマ⁽²⁾である。18世紀末イギリスのロバート・バーカーの考案になるのだが、革命からこのかた途絶えがちだった英仏間を自由に往来できたアメリカ市民ロバート・フルトンは、この新奇な見せ物をパリに招来した。ちなみにフルトンは、ハドソン河での航行実験に先だって、セーヌ河に蒸気船を浮かべている。これ以後1830年代初頭まで、「パノラマの時代」とでもいうべき民衆芸術が花開いた。

パノラマの数ある競争相手のうち最も強力となったのが、ジャック・ダゲールの開発したディオラマ⁽³⁾である。これはその名のとおり、映写幕の前後二つの方向から光を当てて、一瞬のうちに場面転換ができるように工夫した仕掛である。先にはオペラ座の舞台装置家として、のちにはダゲレオタイプの創始者として名をあげることになる人物の才能が、如何なく発揮されたものだった。

銀版写真から始まって様々な感光材料が開発され、安価に写真を楽しむことができるようになると、肖像画家が職を失う一方で、写真家という新しい職業が成り立つようになった⁽⁴⁾。エチエンヌ・ジュール・マレーの分解写真は、人体の働きにたいする関心を高め、最終的にはエディソンのキネマスコープとリュミエール兄弟のシネマトグラフを生み出すことになる。一般に映画の直接の起源とされるのは後者のほうであり、19世紀における映像文化でのフランス人の貢献を見事に締めくくっている。

とはいえ最真目に見ても、パリが民衆文化の都だったのは、1830年代から、せいぜいが60年代までの期間に過ぎなかった。その短い間に、コメディ・フランセーズに陣取る正統派の演劇の凋落を尻目に、ロマン派劇、妖怪物(フェリー)から出発したレヴュー(20世紀のミュージカルの先駆けとなる)、ブルヴァール劇と呼ばれた中産階級向けの人情劇(いわゆるメロドラマ)、パレード

(劇場の前で演じられる呼びこみ代わりの寸劇)などが発展していく。グランド・オペラや喜歌劇の新作がパリで発表され、ガス灯、次いでアーク灯に照らされたオペラ座の輝きもいっそう増した⁽⁵⁾。

さらに前世紀には台詞のある芝居を禁止されていたアクロバットやパントマイムなど、近世以来の定期市演芸も独自の演目を開拓する。フランコーニ兄弟団と名乗ったサーカスの戦闘場面の再現や、オリオールクラウン芸は広く大衆の支持を集めた。ジャック・ウジェーヌ・ロベール＝ウーダンによる奇術の革新、アモロス大佐に始まる体育家たちの活動、ジャック・レオタールによる空中ブランコ芸の創始などが、世間の身体的な価値観を一変させた⁽⁶⁾。

昼夜の別なく降りそそぐ人工の光、理性の教えを振り捨てた感情の高まり、自然を欺く身のこなし。新時代を予告するそうした身体の意味づけの変化から、来たるべき産業社会を賛美する装置が必要とされてくる。老若男女、身分と階級、それに政治的主張の別を越えて人々が群れつどう都市的装置。身体を媒介項として新奇な表現を競うこうした社会を背景として、万国博覧会が誕生した。

万国博の故地であるロンドンとパリに、それに先だって流行したパノラマの文化論は、すでに論じ尽くされた感がある。湾曲したスクリーンに絵を描き、暗くした室内で強い光を当てて、観客をひとときの幻想世界に誘う見せ物に過ぎないが、それはそれで人間精神の発展の歴史に一時代を画した。パノラマにおける時間と空間の歪みは、後世の万国博におけるモノと記号の展示の歪みを先取りするものだった。あまねくモノを見せつけることで観客の視線を満足させると同時に、モノの背後にある社会関係をむしろ視線から遠ざける。そうした視線の誘導によって、記号の世界の表象を実態から離しているのだ。そこには「透明なまなざし」などは存在しない。むしろ、企画するがわの意図が露骨に示される空間である。そしてその意図とは、モノの世界のスペクタクル性を求めるメトロポリス住民の、移ろいやすい身体的な価値観に媚びたものだった。

19世紀の万国博で特筆されるべきは、モノの展示と同時に、応用的な学問分野の研究集会(カンファランス)が開かれたことである。19世紀後半の五十年間だけ見ても、そのテーマは秩序ある進歩、新時代の道徳、そして自然との調和へと変わっていった⁽⁷⁾。そうしたスローガンから、開催者や観覧者の世界観が透けて見える。研究集会とならんで、万国博開催にあわせて様々な見せ物も用意された。この論考のためにまとめた「19世紀パリ・街の話題」の年表(次号掲載の予定)には、パノラマの演題、芸能界のスキャンダル、スポーツ・イベントな

どが満載されている。

その中でも、人間の展示には興味をそそられる。百貫デブや親指トム、シャム双生児など異形の者を見せ物にしたり、異邦人の展覧が馴化園（パリ動物園）の名物になっていたことなどに、現代人は眉をひそめることだろう。ところが、そうした身体性への素朴な好奇心こそ、万国博の初期の精神を体現していたのだ。人気を集めた見せ物に、市民の素朴な感性が浮き彫りにされる。モノの展示に傾けられた情熱が、万国博会場におし寄せた人々の期待を物語りもくれる。

1 万国博と「自然の支配」

万国博覧会の性格自体は曖昧なものである。たとえばその呼び名は、世界各国語で大きく異なっている⁽⁸⁾。英語でも、イギリスでは「大展示会」(Great Exhibition)、アメリカでは「世界フェア」(World's Fair)というのが習い。ドイツ語では英米語を足して二で割ったような「世界展示」(Weltausstellung)という。しかし、ドイツ圏で万国博がおこなわれたのは、これまでのところ1873年のウィーンのみ。2000年に予定されているハノーヴァー万国博は、規模と内容の両面で大いに関心をそそる。

次項で詳しく触れるように、万国博の本家を自認するフランスでは、それを「普遍的展覧会」(Exposition universelle)と称する⁽⁹⁾。展示とか展覧とかフェアとかいった言葉によって、物を並べるときの階層秩序といったことが問題となるのはもちろんである。まして、世界とか普遍とかの形容詞がつくのが万国博たる所以なのだから、展示を指揮する者の、ということは万国博のホストとなる地域や都市の世界観が問われることになる。万国博を問題とするときには、もはや地域経済の活性化などという偏狭な地方根性が出る幕ではない。

19世紀末においてすでに、万国博はたんなるモノの展示の場ではなかった。19世紀から20世紀へと移ったこの前の世紀転換期には、具体的なモノから抽象的な記号の展示へと、万国博の展示の性格も変わった⁽¹⁰⁾。20世紀が21世紀となる今度の世紀転換期において、万国博の意味づけに変化があるとしたら、それは何だろう。当局が自然保護派の議論をとりこむために出してきた、「自然の英知」というテーマでいいのだろうか。万国博の存在意義もさることながら、自然の意味づけも時代によって変わっていかざるをえない。逆にそこにこそ、活路が見出せそうである。

博覧会の起源については、あまりにさかのぼり過ぎても意味はない。ごく大ざっぱに言えば、ヨーロッパにかぎらず通商上の要地であつたフェアやメッセ、あるいはバザールを、はるかな起源とする。万国博にかぎっ

ていえば、先述したように1851年ロンドンのザ・グレイト・エグジビションがその初めとなった。この世界初の万国博は、18世紀末以来パリで開かれてきた産業博覧会の形式に習ったもので、物の展示に執心した催しだった。他方のパリ産業博については、さしあたり、それがフランス革命の申し子であり、産業社会への脱皮を促す刺激策として導入された国家装置の一つだったことを強調しておきたい。規模の点で万国博とは比較にならないほど小さかったが、国産品の品質向上と首都住民の意識変革を狙ったものだった。いずれにせよ、ロンドンとパリの二都が博覧会の草創の地であり、西欧文明の担い手たるべく、この三百年もの間、産業社会の主導権をめぐって覇を競ってきたのである。

この課題の射程を、ロンドン万国博以来こんにちまでの百五十年とか、あるいはパリ産業博以来の二百年とかでなく、三百年としたのは、それなりのわけがある⁽¹¹⁾。太陽王ルイ十四世が親政を開始したばかりの1673年に、パリで初めての美術・彫刻展覧会が開かれた。これが美術アカデミーの始まりともなった。それから一世紀近くを経た1761年には、ロンドンで初めての産業博覧会が開催されている。こちらはウォルター・シップレーという人物の提案に沿ったもので、個人事業のかたちで営まれたところに特徴がある(表1「万国博のテーマ」を参照)。

フランスを初めとするヨーロッパ大陸諸国では、大規模な博覧会は国家が推進するものであり、大きな欠損が出て最終的には国家予算で処理された。歳出増によって景気を刺激する経済理論の先駆者という言葉過ぎだが、ともかく金に糸目をつけない大盤振舞の趣きである。それにたいしてアングロ・サクソン系の諸国では、個人事業とはいわないまでも、そのつど会社を組織して博覧会を運営したものだ。つまりは、収支の均衡を是とする立場である。

いまからほぼ二百年前、フランス革命の興奮さめやらぬ1798年のパリに目を転じよう。幾多の事件の現場となった元の練兵場(シャン・ド・マルス)で産業博覧会が開催された。建築家ジャン・フランソワ・シャルグランによる「産業殿堂」(Temple de l'Industrie)と、それに連なる68もの連続アーチが広場を埋めた。野外では、革命戦争で大活躍した気球の上昇実演があり、屋内には全国から最新の製造品が展示された。歴史的に重要な出品物に、メートルとキログラムの原基がある。優秀賞をあたえられた中には、出版業者デイド家による豪華本、あるいは気球操縦者としても名を馳せた化学者ニコラ・ジャック・コンテによる人工クレヨンがあった。映画用語の絵コンテなどという言葉は、彼の名に由来する⁽¹²⁾。

パリの産業博は以後、ナポレオンの支配下で三度、すなわち1801年にルーヴル宮殿、翌02年と06年には廃兵院

表1 万国博のテーマ

西暦	都市	特記事項およびテーマ (斜体字)
1673	パリ	美術アカデミーによる絵画と彫刻の展覧会 (いわゆるサロン)
1761	ロンドン	シップレーの組織した第一回ロンドン産業博覧会
1798	パリ	第一回パリ産業博覧会の開催, シャン・ド・マルスの産業神殿
1851	ロンドン	造園業者バクストンの設計による水晶宮 (Crystal Palace)
1855	パリ	鉄骨ガラス天井の産業宮 (Palais de l'Industrie)
1862	ロンドン	装飾芸術の出品作はヴィクトリア=アルバート美術館に収蔵
1867	パリ	シャン・ド・マルスに楕円形の巨大な建物を建造
1873	ウィーン	文化と教育 (<i>Culture et éducation</i>)
1876	フィラデルフィア	合衆国独立百周年 (<i>Centennial of the Independence</i>)
1878	パリ	トロカデロ宮 (Palais du Trocadéro)と諸国民通り
1880	メルボルン	技芸全般 (Arts, Manufactures, Agric./Indust. Products)
1888	バルセロナ	機械プラントの導入 (<i>Maquinista terrestre y marítima</i>)
1889	パリ	フランス革命百周年 (<i>Centenaire de la Révolution française</i>)
1893	シカゴ	新大陸発見四百周年 (<i>Discovery of America</i>)
1897	ブリュッセル	植民地博 (Exposition coloniale de Tervueren)
1900	パリ	十九世紀の総括 (<i>Le bilan d'un siècle</i>), 電気宮
1904	セントルイス	ルイジアナ買収百周年記念 (<i>Acquisition of Louisiana</i>)
1905	リエージュ	独立六五周年記念 (<i>Anniversaire de l'indépendance belge</i>)
1906	ミラノ	シンプロン・トンネル開通 (<i>Percée du tunnel du Simplon</i>)
1910	ブリュッセル	植民地博覧会とコンゴ博物館 (Musée du Congo)
1913	ヘント (ガン)	コンゴ宮とそのパノラマ (Palais du Congo et son panorama)
1915	サンフランシスコ	パナマ運河の竣工記念 (<i>Inauguration du Canal de Panama</i>)
1929	バルセロナ	電気産業の振興 (Exposition des industrie électriques)
1933	シカゴ	進歩の世紀 (<i>A Century of Progress</i>)
1935	ブリュッセル	鉄道百年とコンゴ自由国創設記念 (<i>Transports/Colonisation</i>)
1937	パリ	現代の技芸 (<i>Les arts et les techniques dans la vie moderne</i>)
1939	ニューヨーク	未来世界の建設 (<i>Building the World of Tomorrow</i>)
1958	ブリュッセル	より良い世界 (<i>Bilan du monde pour un monde plus humain</i>)
1962	シアトル	宇宙時代の人間 (<i>Man in the Space Age</i>)
1964	ニューヨーク	ディズニー社の企画 (audio-animatronics; GE, Ford, Pepsi, etc.)
1967	モントリオール	人間と世界 (<i>Terre des Hommes/Man and His World</i>)
1970	大阪	人類の進歩と調和 (<i>Progrès humain dans l'harmonie</i>)
1992	セヴィリヤ	発見の時代 (<i>La Era des los Descubrimientos</i>)
2000	ハノーヴァー	ヨーロッパ新時代!
2005	愛知	人類の英知と未来, 自然との共生?

(レ・ザンヴァリッド, いまは当のナポレオンの遺骸が眠る)で開かれている。政治体制が目まぐるしく転換したにもかかわらず, その開催は政権の経済政策の目玉となった。ブルボン王朝が復活した復古王政期の1819年には, 会場をルーヴル宮殿に戻している。23年にはあらたにシャンゼリゼを会場とし, 27年に同地でもう一度と, 復古王政下でしめて三度おこなわれた。ついでブルボン家の分家であるオルレアン家が王位にのぼった七月王政期にも, 34年, 39年, 44年の三度おこなわれた。シャンゼリゼを会場とし, 五年ごとに開催される習わしが, この間に定着した。

ちなみに, 産業博の第八回目に当たる1834年のおりの組織委員会には, 虚構の人物でありながら同時代の雰団

気の色濃く漂わせるジェローム・パチュロが, 小売り業界の大立て者として招かれている⁽¹³⁾。メリヤス製品を商うこの帽子屋は, 木綿には自由貿易が必要とし, また毛織物には保護貿易が不可欠とする, いわば是々非々の態度をとって, 居並ぶ委員たちを唾然とさせたものだ。この例からも分かるように, 国内産業振興を詠い文句とするわりに, 経済成長を是とする態度が世論の大勢を占めることはなかった。パリ産業博の最後となった第十一回目は1849年のこと⁽¹⁴⁾。このときにはすでに第二共和政の名のもとに, ナポレオンの甥のルイ=ナポレオンが大統領となっていた。産業博が万国博に切り替わるとき, ボナパルト家の名による強い政治指導力が, ようやく経済界の体質改善を促すことになるだろう。

表2 万国博の収支決算

通貨の名称にかんして、Lは英ポンド、Fは仏フラン、fはオーストリアのフローリン、Pはスペインのペセタ、Bはベルギー・フラン、lはイタリア・リラ、Cはカナダ・ドルを示す。収支決算は米ドル\$で表示した。

西暦	都市	入場者数	支出	収入	収支決算
1851	ロンドン	6,039,195	335,742 L	522,179 L	+932,185 \$
1855	パリ	5,162,330	11,340,000 F	3,200,000 F	-1,628,000 \$
1862	ロンドン	6,096,617	458,842 L	459,632 L	+3,820 \$
1867	パリ	11,000,000 ~15,000,000	22,984,000 F	26,114,000 F	+626,000 \$
1873	ウィーン	7,255,000	19,123,270 f	4,256,349 f	-7,433,460 \$
1876	フィラデルフィア	10,000,000	8,000,000 \$	3,700,000 \$	-4,000,000 \$
1878	パリ	16,156,626	55,889,961 F	26,685,196 F	-5,737,039 \$
1880	メルボルン	1,330,000	320,000 L	70,000 L	-1250,000 \$
1888	バルセロナ	2,000,000 ~2,300,000	8,500,000 P	2,000,000 P	-1,300,000 \$ ~-1,400,000 \$
1889	パリ	32,250,297	41,500,000 F	49,500,000 F	+1,600,000 \$
1893	シカゴ	27,500,000	27,040,316 \$	28,448,524 \$	+1,408,208 \$
1897	ブリュッセル & 1,800,000	6,000,000	5,700,000 B	7,000,000 B	+260,000 \$
1900	パリ	50,860,801	119,225,707 F	126,318,168 F	+1,100,000 \$
1904	セントルイス	19,694,855	25,000,000 \$ ~31,500,000 \$	26,000,000 \$	-1,000,000 \$
1905	リエージュ	7,000,000	14,451,800 B	14,536,900 B	+15,000 \$
1906	ミラノ	7,500,000 ~10,000,000	11,000,000 l	13,000,000 l	-400,000 \$
1910	ブリュッセル	13,000,000	17,750,000 B	17,500,000 B	-50,000 \$
1913	ヘント(ガン)	9,503,419	16,500,000 B	14,000,000 B	-50,000 \$
1915	サンフランシスコ	19,000,000	25,865,914 \$	27,178,065 \$	+1,312,150 \$
1929	バルセロナ	—	130,000,000 P	—	—
1933	シカゴ	38,872,000	42,900,000 \$	43,589,154 \$	+688,165 \$
1935	ブリュッセル	20,000,000	197,000,000 B	252,400,000 B	+6,300,000 \$
1937	パリ	31,040,955	1,661,024,345 F	1,443,288,391 F	+8,660,000 \$
1939	ニューヨーク	44,955,997	125,000,000 \$	143,000,000 \$	-18,000,000 \$
1958	ブリュッセル	41,454,412	2,571,890,000 B	2,530,500,000 B	+709,000 \$
1967	モントリオール	50,306,648	431,904,683 C	221,239,872 C	-215,550,000 \$
1970	大阪	64,218,770	89,110,905,655 Y	108,550,307,672 Y	+52,820,000 \$
1992	セヴィリヤ	40,000,000	75,000,000,000 P	—	—

2 帝国・商品・娯楽

1851年にロンドンのハイド・パークで開かれた万国博は、造園業者ジョセフ・パクストンが建設した「水晶宮」(クリスタル・パレス)によってすべてが語り尽くされる⁽¹⁵⁾。大量生産が可能な鉄とガラスの、しかもプレハブ方式による大建築は、温室の規模を拡大しただけとはいえ、見る者を圧倒した。「自然との共生」という観点で、面白いエピソードもある。敷地にあった榎の大木を切らずに、そのまま片方の翼のアクセントとして建物の中に取りこんでいた。

トマス・クックの旅行業も、この機会を捉えて大いに発展した。クックはたんなる観光業者ではなく、熱烈な

バプテリストで、かつ禁酒主義者だった⁽¹⁶⁾。下層民衆を飲酒の悪癖から遠ざけるのが、彼の事業欲の源泉だった。大英帝国の発展によって労働者階級でも享受できるようになった余暇の、効果的な利用をあみだしたのが彼クックだった。それだけでなく、日常の節約で旅行費用を積み立てるという新方式までうちだした。万国博見物のための団体旅行を組織したのである。

万国博の規模は1851年からこのかた、不断の発展を遂げたというわけではない。拡大基調の中で収支面の不安が起きると次の企画は縮小を余儀なくされる(表2「万国博の収支決算」、および表3「万国博の規模」を参照)。1862年のロンドンでの第二回目の万国博は、第一回で得た利益によって取得したサウス・ケンジントンの土地を

表3 万国博の規模

西暦	都市	面積	部門	出品者数(自国/%)	参加国数	国際会議
1851	ロンドン	10.4	4 (30)	14,000 (6,861/50)	25*	# 4 福音主義会議
1855	パリ	15.2	8 (30)	25,954(11,986/50)	29*	# 2 国際統計会議
1862	ロンドン	12.5	4 (40)	25,000 (7,000/28) ~29,765 (9,140/33)	35**	4(禁酒など)
1867	パリ	68.7	10 (95)	52,200(15,969/30)	42**	14(医療など)
1873	ウィーン	233	26	53,000 (9,104/17)	35**	10(規格など)
1876	フィラデルフィア	115	7(340)	30,864 (8,175/26.5)	35	6(特許など)
1878	パリ	75	9 (90)	52,835(25,872/49)	36	32 {18}***
1880	メルボルン	25	10 (82)	12,791 (2,130/17)	18**	1(社会科学)
1888	バルセロナ	46.5	23 (53)	12,900 (8,600/66)	28	4(工学など)
1889	パリ	96	9 (83)	61,722(33,937/55)	54	69 {18}
1893	シカゴ	290	12(172)	70,000(25,000/36)	45	55
1897	ブリュッセル	36	14 (56)	10,668 (4,500/42) ~13,263 (5,521/42)	27	23
1900	パリ	120	18(121)	83,047(38,253/46)	43	127
1904	セントルイス	500	15(144)	—(15,009)	60	15(学術など)
1905	リエージュ	70	21(128)	13,000 (4,000) ~17,000	36	46
1906	ミラノ	100	11	27,000 (3,995/15)	50	94
1910	ブリュッセル	90	22(128)	29,000 (6,500/22.5)	25	76
1913	ヘント(ガン)	130	22(128)	18,932 (5,000)	26	91 [20]****
1915	サンフランシスコ	254	11(156)	30,000	64	19[928]****
1929	バルセロナ	118	18(116)	12,900	22	—
1933	シカゴ	170	—	—	21	1(科学)
1935	ブリュッセル	125	9 (28)	8,930 (5,000/56)	30	—[312]****
1937	パリ	105	14(114)	11,000	47	—[602]****
1939	ニューヨーク	500	—	1,500	55	—
1958	ブリュッセル	200	9 (52)	—	48	13[426]****
1962	シアトル	30	5	—	49	—
1967	モントリオール	400	9 (52)	60,845	62	(学術会議多数)
1970	大阪	330	9 (56)	—	77	[研究集会多数]
1992	セヴィリヤ	215	—	—	111	—

*プロイセン中心のドイツ関税同盟や教皇領を含むイタリアは、それぞれ一国と数えた。

**イギリス以下の植民地保有国の海外領土はそれぞれの母国に包摂した。

***{ } 内は万国博組織委員会が管掌しない国際会議の数である。

****[] 内は研究集会(カンファランス)の数である。

会場とした⁽¹⁷⁾。そのおりの展示品を伝えるのが、大英帝国極盛期の女王と夫君の名を記念した、ヴィクトリア・アルバート博物館である。いまもそこには、装飾美術に重点を置いた展示を見ることができる。おりから攘夷の高まりによる開港の遅れを弁明するため、江戸幕府は最初の遣欧使節団(正使は竹内下野守)を送った。そこには、福沢諭吉も通辞として加わっていた。日本から送られた品々とともに、侍たちの風体もまた、生きた展示品として西欧人の耳目を集めたが、けっして未開野蛮という評価ではなかったようだ⁽¹⁸⁾。

1873年のウィーン万国博は、いまは巨大な観覧車が目目をひくプラターを主会場とし、環状道路(リング)沿いの公共建築を整備して、世界からの客を集めた。お

りから欧州歴訪中の、岩倉俱視を正使、大久保利通を副使とする明治政府の使節団が実際に見聞したのは、この万国博である。日本のコーナーには、なんと名古屋城の金鯱が据えられていた。自国の工業化を焦る使節団は、それを誇らしい目で見たらうか。雌雄一對の雄のほう、明治初期に大屋根から下ろされて国内を巡回し、その果てにヨーロッパの内陸の都にまでいった。金鯱は太平洋戦争末期の空襲で焼け落ちて、いまは茶釜に化けている。二度と開かないその眼は、2005年にいったいどのような気持ちで新たな展示品を眺め、また展示品を見つめる観衆を評することだろう。

19世紀はパリの産業博覧会で開け、1900年のパリ万国博で締めくくられたといっても過言ではない。ところが

表4 オリンピックの規模

西暦	都市	参加国	選手数	競技数	種目数	特徴
1896	1 アテネ	13	280(311)	7(8)	43	古代オリンピックの故地
1900	2 パリ	19	1,066	16	60	万国博の添え物として
1904	3 セントルイス	12(13)	625(681)	16	87	万国博が中心で競技は低調
1908	4 ロンドン	22	1,999	22	110	英仏博との共催
1912	5 スtockホルム	28	2,490	15	108	理想を実現, 日本が初参加
1916	6 ベルリン	中止				
1920	7 アントウェルペン	29	2,668	23	161	オリンピック旗とモットー
1924	8 パリ	44	3,070	19	140	オリンピック村の建設
1928	9 アムステルダム	46	2,694	16	119	女子陸上競技の採用
1932	10 ロサンジェルス	37	1,328	16	128	観客125万人, 収益100万\$
1936	11 ベルリン	49	3,956	21	148	ナチスの宣伝, 聖火リレー
1940	12 ヘルシンキ	中止				当初予定の東京が返上
1944	13 ロンドン	中止				
1948	14 ロンドン	59	4,064	19	151	友情のオリンピック
1952	15 ヘルシンキ	69	4,879	18	151	初参加のソ連が躍進
1956	16 メルボルン	67	3,113	17	147	ソ連金メダル獲得数第一位
1960	17 ローマ	83	5,348	18	150	標準記録を設定, 電気計時
1964	18 東京	93	5,081	20	167	二つの中国と朝鮮の問題
1968	19 メキシコシティー	112	5,423	19	182	チェコ侵入と人種差別抗議
1972	20 ミュンヘン	122	7,173	21	205	アラブ・ゲリラの襲撃事件
1976	21 モントリオール	88	6,026	21	198	大きな赤字の穴埋めに苦慮
1980	22 モスクワ	81	5,217	21	204	西側諸国のボイコット
1984	23 ロサンジェルス	140	6,797	21	224	ソ連と東欧圏のボイコット
1988	24 ソウル	159	8,465	23	260	アジア各国が大躍進
1992	25 バルセロナ	169	9,368	25	284	セヴィリヤ万国博を従えて
1996	26 アトランタ	—	—	26	271	近代オリンピック百周年
2000	27 シドニー	—	—	—	—	

Source: *Olympic Movement Fact Book*, 1995.

20世紀に入ると、アメリカ合衆国が万国博の主舞台となる⁽¹⁹⁾。以後は、この新興国での催しが話題の中心になる。国際外交の舞台でイギリスを共通の敵としてきた米仏両国は、革命前からの親密な関係を保っていた。ニューヨーク港に立つ「自由の女神」像の骨組みとなる鉄骨を作ったのが、フランスの橋梁建設のバイオニアでもあったギュスタヴ・エッフェルその人である。1876年に新大陸で開かれた最初の例となったフィラデルフィア万国博は、電気の時代の幕開けを告げるものだった。主な展示品の中には、グラハム・ベルの電話が含まれている。

1893年の万国博は内陸部のシカゴで開催された。その主会場となったジャクソン公園には、ホワイト・シティと名付けられた主展示場と、ミッドウェイという娯楽施設がもうけられた。こうした臨時的娯楽施設を併設したのは、中西部でよく見られる収穫祭などの行事になったもの。同じころ、この国で最盛期を迎えていたサーカス興行が、万国博の事例を踏襲することになる。

1904年のセントルイス万国博では、オリンピックが同時に開催されている。万国博のほうはアイヴォリー・シ

ティという主会場でおこなわれた。第三回目にあたるオリンピックのほうはというと、ほとんど野原と見紛うばかりの郊外の競技場で、二か月にわたって延々と続けられた。その競技種目というのが、綱引きや樽くぐりというのだから、その素朴さには驚かされる。実際のところ、初期のオリンピックは万国博の添え物でしかなかった。とくに第二回目、1900年のそれは主唱者ピエール・ド・クーベルタンのお膝元パリでおこなわれているながら、競技そのものはお粗末の一語に尽きた⁽²⁰⁾。とはいえ、以後のオリンピックは、世界大戦による中断や冷戦末期のボイコット騒ぎがあったとはいえ、規模の面では拡大の一端をたどっている(表4「オリンピックの規模」を参照)。

第一次世界大戦が始まった翌年の1915年、ヨーロッパの戦場から遠く離れたサンフランシスコで万国博が開催された。これはもっぱら、アメリカ中西部で力をもっていた鉄道会社のデモンストレーションといった色彩が強かった。激しい競争を繰り広げた各社が、博覧会場でもパヴィリオンの広さを競ったものだ。33年のシカゴでの第二回目の万国博となると、さすがに面目も一新される。

大恐慌の直中にあったとはいえ、1920年代の消費景気の爛熟を背景に、アメリカの製造業の裾野の広さを世界に示す場となった。たとえば、それまで一顧だにされなかった事務機械や家電製品の意匠がとりあげられた。ここにインダストリアル・デザインが誕生したとさえいわれる。1939年には、それまで満を持していたニューヨークが万国博の開催を引き受ける。いまはスポーツの複合施設、とくに全米オープン・テニスの会場として知られる北郊のフラッシング・メドと東郊のコニー・アイランドが、万国博会場として整備された。やはり産業の進歩を示す展示だけでなく娯楽施設も併設して、観客増を当てこんだものだ。

第二次大戦後の1958年に開かれたブリュッセル万国博は、ヨーロッパの戦後復興がテーマ。元来がベルギーは、パリ万国博の合間あいまに、植民地支配に力点を置いた国際博覧会を何度も実施してきた実績がある。小国の首都はこれを機に、統合されたヨーロッパの首都として整備されていく。1962年にはあらためてアメリカに舞台を移し、太平洋新時代を唱えるシアトル万国博が開かれた。それから間もない64年、ニューヨークで第二回目の万国博が開かれた。これは、39年の会場を再利用したもので、しかも国際博覧会事務局による承認を得ていない。とはいえ、ニューヨークでの二度にわたる博覧会の会場はスポーツ・イベントの殿堂や遊園地としていまに受け継がれている。

とくに第二回目のそれでは、ディズニー社の企画による、アニメと音響を合体させたオーディオ・アニマトロニクスが話題を集めた。同社との提携から各地のテーマ・パークへ受け継がれたものは数多い。いまもディズニー・ランドで体験できるいくつかの施設（たとえばイツ・ア・スモール・ワールド）は、このときの遺産である⁽²⁾。合衆国での万国博は一過性のイベントであることを止めて、経済的・社会的に永続する効果を生み出したといえる。

1967年のモンリオール万国博は、一つの転機を画している。カナダにとっては英仏系住民の融和、世界に向けては諸民族の協調を詠い文句にした。つまりは、単純に産業技術の進歩を謳歌できなくなってきたのだ。同じ意味で、日本人にとって大きな意味を持った1970年の大阪万国博も、「お祭り広場」とか「太陽の塔」などで、技術開発よりも祭りのイベントとしての性格を全面にうちだした。しかも、そこには多数の前衛芸術家が動員されている。モンリオールや大阪の例に比べると、いまだ記憶に新しい85年の「つくば科学博」は、観客から夢を奪ったともいえる。広告代理店の影響力だけが前面に出てしまい、参加型の博覧会という方向性からすれば、明かな後退であるといわざるをえない。

直近の万国博は、1992年のセビーリヤのそれである。コロンブスの航海から五百年を記念して、「発見の時代」を惹句とした。ところが実態は、同じ年に開かれたバルセロナ五輪の添え物に成り下がっている。オリンピックが万国博の添え物だった1900年のパリや04年のセントルイスとは、まるで様変わりしてしまった。万国博覧会の權威の失墜は覆いようがない⁽³⁾。20世紀におけるこうした変化は、いったい何に起因するのか。次項では、パリで開かれた六度の万国博を検討することによって、21世紀につながる議論をすくいとっていこう。

3 パリの万国博遺跡

1855年にパリで開かれた初めての万国博では、従来の産業博覧会の舞台だったシャンゼリゼに、1798年のひそみにならった「産業宮」が新築されている。それとは別に、セヌ河畔に「機械館」がもうけられた。また美術展覧会の流れをくむだけに、同時に美術展が開催されたところが、ロンドン万国博との違いである⁽⁴⁾。余談だが、オペラ座の監督をつとめたこともあるジャック・オッフエンバックが、庶民向けの劇場デラスマン・コミック座を買収して自作を上演させ、大当たりをとったのもこのときのこと。それから間もなく「天国と地獄」（原題名は地獄のオルフェウス）で記録的な興行収入をあげた。そこで繰り広げられる狂騒的な曲は、万国博景気に浮かれる第二帝政下のパリ市民の気分を映し出している。

1867年の第二回万国博の組織委員長となったのが、家族社会学の元祖としても有名なフレデリック・ル・プレーという人物である⁽⁵⁾。彼はナポレオン三世の覚えめでたく、すでに第一回のおりにも組織委員会に名を連ねていたのだが、このときには全権を委任されて采配を振ったものだ。まずは会場を、手狭なシャンゼリゼから再度シャン・ド・マルスへと移し、またその創案になる楕円形の建物で広大な敷地を覆い尽くした。

普仏戦争とパリ・コミューンで大きな痛手をこうむったフランスが、第三共和政政府の威信にかけて開催したのが、1878年の第三回万国博である。このときには、セヌ河をはさんでシャン・ド・マルスの対岸にある高台にトロカデロ宮殿が建設されている。そこには植民地からの出展物が山と積まれた。フランスは第二帝政期の1860年前後から、それまでの西インド諸島やアフリカ大陸に加え、東南アジアの一角に拠点を確保していた。ドイツにたいする復讐の念に燃えながら、ヨーロッパの外交面で主導権を握れないでいる共和政政府は、保守的な王党派やボナパルト主義者よりいっそう膨張政策に熱心であるように見えた。

1889年の第四回万国博は、フランス革命百周年を記念

する行事でもあった⁽²⁵⁾。エッフェルによる高さ三百メートルの塔がその最大の呼び物となったのだが、計画時から知識人の間だけでなく広く世間の反発を呼んだ⁽²⁶⁾。塔の足元には、建築家シャルル・ガルニエによる、数十もの諸民族の住居が展示されていた⁽²⁷⁾。すでにその雛形は67年のときにも見られたのだが、フランス人の考える文明から野蛮までのスペクトルを、住まいというかたちで実地に示したところに興味を覚える。ちなみにガルニエは、古今の建築様式を寄せ集めた第二帝政様式を代表するオペラ座の設計者でもある。

1900年にはシャンゼリゼのグラン・パレとプチ・パレを主会場として、第五回万国博が開催されている⁽²⁸⁾。フランス人のクーベルタンが主唱して始まったオリンピックは、第一回目が1896年にギリシアのアテネでおこなわれ、そこそこの成功を収めた。オリンピックの第二回目は、万国博共催のようなかたちでパリで開かれたが、共和派の有力政治家の理解を得られず、みじめな結果に終わった。先に触れたセントルイスの事例は、その失敗を再度繰り返したに過ぎない。

六回目の1937年が、さしあたりパリで開かれた万国博の最後となった⁽²⁹⁾。このときには、かつてのトロカデロ宮殿に代わって、アール・デコ調のシャイヨー宮殿が建設された。いまそこには、革命期以来のモニュメント博物館や冒険家ジャック・クストーにちなんだ海洋博物館などが入っている。六回目の万国博のさいには、シャイヨー宮殿の前にソ連館とナチス・ドイツ館が向かいあって建ち、それぞれ巨大な鎌と鉄十字を掲げて、第二次大戦の予兆を告げていた。

万国博以外にも、パリでは見過ごすことのできない重要な博覧会が開かれている。たとえば、装飾博覧会である。とりわけ万国装飾美術博とうたった1925年のそれは、アール・デコの幕開けを告げた行事として記憶される。こちらは、いかにも高級既製服(オートクチュール)の都としての歴史を感じさせる催しである。

装飾博覧会と好対照をなすのが、住宅博覧会である。その始まりは、コレラ対策が急がれた19世紀なかば以来の衛生住宅展覧会。19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリのみならず地方の主要都市で頻りに開かれた都市衛生博覧会では、近代的な生活アメニティが提案されたものだ。その最終局面では、ミーズ・ヴァン・デル・ローエヤル・コルビュジエらいった錚々たる顔ぶれが、新しい発想に基づく共同住宅を提案している。つまり、その時点では近代を乗り越える超近代主義的な建築が、ヨーロッパを中心とする近代主義的な建築設計の発想を延命させたのだ。

他方で、19世紀の万国博の目玉となる展示だった植民地の文物の紹介が、20世紀の前半には独立した企画とな

る。当初からパリ万国博の目玉であり、20世紀に入るとコンゴを確保したベルギーでの博覧会の中心行事となった。1931年にパリ西南郊のヴァンセンヌで開催された植民地博覧会はとりわけ大規模で⁽³⁰⁾、イギリスに次ぐ世界第二の植民地帝国を誇示するものだった。インド支配に陰りが見え始めたイギリスは不参加を決めこんだため、大陸諸国のみ参加となった。フランスはカンボジアのアンコール・ワットを再現し、オランダはバリ島の寺院を模した建造物をわざわざ建てたほどの気の入れよう。民族文化の紹介に意を用い、現地の都合を優先したように見えて、じつはヨーロッパ人による植民地支配を永続化しようと図ったものだった。

国際博覧会事務局を擁するパリでは、この1937年を最後として万国博は開かれていない。この組織自体が弱体で、フランス外務省の外局に過ぎないようにも見える。第二次世界大戦後の冷戦構造のもとで、西欧が政治・経済上の覇権をまったく失ってしまった以上、それは当然のことともいえる。80年代には、来たる89年の革命二百周年に向けて万国博を開催しようとの声もあがったのだが、ついに実現はしなかった。セヴィリヤ万博の例からして、もはや万国博の時代ではない、という意見も根強い。だからこそいっそう、世界の新秩序が形を現わさるる2000年のハノーヴァー万国博に注目する必要がある。はたしてそれはヨーロッパ統合の実をあげるか否か。日本人としても関心が高まろうというもの。2005年の全体計画は、ハノーヴァーの出来不出来を確かめてから立てても遅くはない。

後書き

本稿を結ぶにあたって、愛知県で開かれた博覧会の歴史を検証しておこう。珍奇な物品の展示という点では、古く江戸時代の薬品会や物産会といった例がある。神社仏閣の「お開帳」で賑わう縁日なども、その範疇に加えられるだろう。1757年に平賀源内が催した薬品会が最初で、名古屋でも幕末に本草学者・伊藤圭介を中心とする集まりがあったという。縁日などでは、それこそ異形の人間も多数参集したことだろう。

感臨丸の渡米に続く江戸幕府の遣欧使節団は、竹内使節団に始まり、徳川昭武使節団に受け継がれ、明治初期の岩倉使節団へと続いていく。これらは、万国博に象徴される産業社会に日本が目を開ききっかけとなった。福沢諭吉がその最初に加わって、明治の啓蒙運動の担い手になったのは、けっして歴史の偶然ではない。

明治政府の殖産興業策を具体化したのが共進会である。全国的な規模の最初のもは1877年の東京・上野で開かれ、ひき続いて大阪の天王寺、京都の岡崎でも催された。

中央官僚の積極的な働きかけもあり、やがて地方ごとに開かれるようになった。名古屋での共進会ブームの頂点となったのが、1910年に鶴舞公園で開かれた関西府県連合共進会である⁽⁹⁾。このとき江戸時代以来の繁華街である広小路に並行して、大須から同公園にかけての東西の道筋が新たな都市軸として整備された。これによって名古屋の繁華街が面的に拡大したといえる。いまでも公園内に残る記念物、たとえば創建当時の姿をとどめる和洋折衷式の噴水と、それと一対で当初の姿に改まったばかりの奏楽堂、昭和初期に流行したアールデコ調の様式でスクラッチ・タイルを身にまとった公会堂、公開の演説の場を提供した普選壇、その普通選挙を実施した大正末期の首相で地元出身の加藤高明の像（基壇のみを残す）、隣接するビール工場の排水を引き入れてかぐわしい匂いがするという龍ヶ池などが、戦前の市民社会の一定の成熟ぶりを物語る。いまは影すら残していないが、私設の動物園もそこにあった。いまはその跡に、子供のための遊具が置かれている。

近代の装置として鶴舞公園のような都市公園が整備され、さらに動植物園を求める声が高まる。奇しくも東山公園の開設と同じ年、1937年に汎太平洋博覧会が開催された。これによって県庁・市役所が麓を接する旧城郭から、繁華街の中心である栄、そして名古屋港につながる南北の都市軸が形を現わした。第二次大戦以降、産業首都としての復興が目ざましかったわりに、旧幕時代の全市をあげての祭（城内の東照宮と城下の若宮神社を行き来する）は復活しないまま、市民は潤いの少ない日常生活に飽き飽きしていた。1992年の名古屋デザイン博では、予算面の配慮からなるべく投資が控えられ、新規の建築物は白鳥の国際会議場だけという堅実ぶりだった。とはいえ、名古屋城がスペインの孤高の建築家A・ガウディふうの装飾に飾られるなど、キッチュな味わいで老若男女をうならせたものだ。ところが間もなく、その経済的「成功」は作られたものという指摘がなされた。吸殻入れを法外な値段で市当局が買い戻していたというのだ。当事者は水をかけられたような気分を味わっただろうが、行政主導の弊害がしみじみ露呈したということだろう。

これから世界的なイベントを組むといっても、無理に背伸びをしないほうがよい。たとえば、半田、犬山、名古屋の山車からくりなど地元の文化遺産を総動員し、それらを生きた形で展示する。信仰や教育など、精神生活も見せるべきである。たとえば高齢者の観音霊場巡りや、若年層の生活の場である荒れる中等教育の現状もさらけ出すことだ。判で押したような公教育の建物と、ガラス張りの私塾や専門学校の建物の対比の妙は、世界の人を驚かさざらう。世代ごとの日常の過ごし方の違いは、他国の人々の目には興味深く映るに違いない。さらに、

近代の工業化の遺跡を整備し、いま現に活動しているセラミック・センターや自動車会社系列の博物館、私鉄が経営する明治村やリトル・ワールドも入場券に刷り加えて、半年がかりのお祭り気分を持続させることだ。

ごく当たり前の庶民生活も展示の対象となる。海外からの観光客には、民宿を斡旋するだけでなく、公営の住宅を一時的に提供したらどうか。もちろん大きな団地から万博会場まで、交通手段を確保してのことだが。主会場にあてるにしても、無住の土地を囲いこむ必要はなからう。既存の環状鉄道を極力利用して、名古屋を中心とする半径五十キロ圏内に、いくつかの小会場を設営すればよい。瀬戸の県有地を核にするならして、そこには大企業の出展を誘う。高蔵寺、桃花台、一宮、津島、名古屋の港湾地域、知多、安城、岡崎、豊田などの空地には、それぞれの自治体のパヴィリオンを仮設する。スタンプ・ラリーの企画でも立てれば、県民が自分の住む場所以外の地域全体に目配りできる機会にもなる。デパート、スーパー、商店街、コンビニの協力もとりつけて、日常の買い物や土産品選びの利便をはかる。さらには、安く飲める酒場、家族で安心して出かけられるレストラン、演劇・娯楽・スポーツのガイドも不可欠である。ポスト・モダンの味付けよりは、むしろプレ・モダンの人間臭さを大事にしたい。

注

- (1) 「ファンタスマゴリー」は、従来の幻灯機や光源に工夫して、映写された像を観客に近づけたり遠ざけたりした。その実際は、R・D・オールティック『ロンドンの見せ物』（国書刊行会、1990、IIの143頁以下）の中の「ファンタズマゴリア」についての次の記述から、おぼろげながら浮かびあがる。「当時パリで人気の幽霊（スケア）ショウ……この発明品は、ヴォルテール、ルソー、マラー、ラヴォワジエといった大革命期フランスの英雄や有名人の幽霊を不気味な煙の只中に呪呼して、客に喜ばしくもおぞましい興奮を与えるのだった。」
- (2) 1830年代までパリの話題をさらった「パノラマ」の評判記については、上のオールティックの書物に加えて、同時代人のE・テクシエ『タブロー・ド・パリ』の次の記述が参考にならう。「シャンゼリゼのマリニー広場はディオラマ、パノラマ、ジェオラマ、ネオラマ、ナヴァロラマ等々、あらゆるラマの叢生の中……。モスクワの炎上、オイラウの戦い、この二つの名場面はパリ全都を感動させた」（TEXIER, Edmond, *Tableau de Paris*, I, 1852, p.19.）。また、W・シヴェルプシュ『闇をひらく光』（小川さくえ記、

- 法政大学出版局, 1988) の「一九世紀の光の娯楽」(同書, 222頁以下) の記述も興味深い。
- (3) デイオリマについては, 写真術の開祖ダゲールの所伝にも触れられる。俯瞰する眼差しの歴史的意味を探ろうとしたのが, J・ウェクスラー『人間喜劇, 十九世紀パリの観相術とカリカチュア』(高山宏訳, ありな書房, 1987) の第I景「パリのパノラマ」である。
- (4) パノラマ絵から銀版写真への進化については, 横江文憲『ヨーロッパの写真史』(白水社, 1997) を参照。
- (5) 19世紀, とくにその前半のパリの劇場の賑わいについては, 拙稿「帽子屋パチュロと二月革命」『名古屋工業大学紀要』(48巻, 1996, 33頁以下) の1でとりあげた。
- (6) 19世紀のフランスで花開いた身体文化については, さしあたり, 拙稿「近代が生み出した「からだ」のかぶき」『体育の科学』(47号, 1997, 534-539頁) にその一部を示している。
- (7) 社会的な物事の発見に次いで, 庶民に道德律を強制し, それが無理と知れてからは規範を提示するにとどめたのが, フランス19世紀思想の流れ。それについて論じるには, 『言葉と物』(渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974) を初めとするM・フーコーの一連の著作が欠かせない。また, その影響を受けた合衆国の人類学者P・ラビノーの著作は, より直接的な問題提起として参照されるべきである。
RABINOW, Paul, *French Modern. Norms and Forms of the Social Environment*, Cambridge, MS, 1989.
- (8) 万国博覧会の名称から考察を始めたのは, P・グリーンハル『エフェメラル・ヴィスタス』(GREEN-HALGH, Paul, *Ephemeral Vistas*, 1988.) から想を得た。この書名は「束の間の視界」とでもいう意味。万国博が提供する未来への展望がじきに有効性を失うことを皮肉ったものである。
- (9) パリの産業博覧会から万国博覧会にいたる道程を詳しく描いた邦語文献では, 鹿島茂『絶景, パリ万国博覧会 サン＝シモンの鉄の夢』(河出書房新社, 1992) が出色の出来である。ただし, 後注(24)で触れるように, 1867年の万国博におけるM・シュヴァリエとF・ル・プレーの影響力の度合いについては議論の余地がある。
- (10) ベンヤミン『パサーージュ論・V』(岩波書店, 1995, 49頁以下) では, パリの万国博の祝祭性, それと同時に「ポエジーの不足」, 都市計画との密接な関連, 労働者の苦役からの解放, 物神への新たな従属などが, 切り抜きふうに描き出されている。また別の箇所では, 19世紀後半に始まる複製芸術の蔓延によって「商品のアウラ」が失われたと指摘され, 万国博の位置づけの歴史的変化とあわせて興味をひく。
- (11) 次にあげるP・オリの著書は, フランスにおける万国博の文明史的意義を論ずる上で見逃せない。1867年パリ万国博がサン＝シモン主義の夢の実現であったとして, その意義を高く評価している点も重要である。ORY, Pascal, *L'Expo universelle*, 1989.
- (12) 最初のパリ産業博の位置づけについては, 次を参照した。BOUIN Philippe & CHANUT, Christian-Philippe, *Histoire française des foires et des Expositions universelles*, Prais, 1980.
- (13) REYBAUD, Louis, *Jérôme Paturot à la recherche de la meilleure position sociale*, 2^e partie, IX, 1842. 拙訳で最近刊行された, L・レーポー『帽子屋パチュロの冒険』(ユニテ, 1997) の後編にあたる。
- (14) 19世紀前半のパリ産業博の様子は, 次にうかがえる。SIMOND, Charles, *Paris de 1800 à 1900*, 3 vols., Paris, 1900.
- (15) 世界最初の万国博についての邦語文献では, 松村昌家『水晶宮物語 ロンドン万国博覧会1851年』(リプロポート, 1986) が要を得ている。長島伸一『世紀末までの大英帝国』(法政大学出版局, 1987) も参考になる。
- (16) W・シヴェルブシュ『楽園・味覚・理性』法政大学出版局, 1986。
- (17) 表にまとめた個別の万国博のテーマや収支決算については, 次を参照した。SCHRÖDER, Brigitte & RASMUSSEN, Anne, *Les fastes du progrès. Le guide des Expositions universelles, 1851-1992*, Paris, 1992.
- (18) 幕末から明治にかけての日本人と万国博との出会いは, 吉田光邦『万国博覧会, 技術文明的に』(日本放送出版協会, 1985) の冒頭に語られている。それ以降の万国博への日本の出展の意味については, 吉田光邦編『図説万国博覧会史1851-1942』(思文閣出版, 1985) が詳しい。
- (19) 合衆国における万国博(ワールズ・フェア)の詳細と意味づけについては, R・W・ライデルの次の著作が参考になる。RYDELL, R. W., *All the World's Fair*, Chicago, 1984.
- (20) 初期のオリンピックについては, J・J・マカールン『オリンピックと近代, 評伝クーベルタン』(平凡社, 1988) の「結び」を参照。そこでは, 第二回のパリと次のセントルイスの大会を失敗と断言され, 「オリンピックは万国博の中での屈辱的な家臣の地

- 位に……甘んじることを余儀なくされた」とある。
- (21) B・トマス『ウォルト・ディズニー』（玉置悦子・能登路雅子訳、講談社、1983）、および、能登路雅子『ディズニーランドという聖地』（岩波新書、1990）を参照。
- (22) 20世紀の百年間をつうじて、オリンピックと万国博の位置が反転したという見解は、吉見俊哉『博覧会の政治学、まなざしの近代』（中公新書、1992）で強調されている。
- (23) 1855年パリ万国博の公式報告書が次である。*Rapport sur l'Exposition universelle de 1855*, Paris, 1857. これ以降、パリで開かれた六回の万国博の様子は、絵入り新聞『イリュストラシオン』の復刻からうかがい知ることができる。*Les grands dossiers de l'illustration. Les Expositions universelles*, Paris, 1987.
- (24) 1867年万国博の詳細については、開催期間中に逐次刊行された絵入りの解説書がある。*L'Exposition universelle de 1867 illustrée*, 2 vols., 1867. その意義を評価する声は、最近とみに高くなっている。大会組織委員長F・ル・プレーは、元サン＝シモン主義者を帝政支持に動員したM・シュヴァリエと、この時期に急接近したに違いない。とはいえ、きわめて個人主義的な哲学を奉じ、帝政崩壊後には分割相続反対の運動を繰り広げるル・プレーを、サン＝シモン主義者の陣営に加えるのは少々ためられる。なお、ル・プレーとその後継者E・シェイソンの万国博での仕事ぶりについては、拙稿「ル・プレー学派の系譜」『日本福祉大学研究紀要』（40号、1993、10-50頁）で触れたことがある。
- (25) 1889年万国博についての文献は数多いが、さしあたり手元にある同時代の絵入りの史料を二点あげておく。*Les Merveilles de l'Exposition de 1889*, Paris, 1889; BIART, Lucien, *Mes Promenades à travers l'Exposition. Souvenir de 1889*, Paris, 1890.
- (26) 次は小著ながら、エッフェル塔をめぐる同時代の議論が手際よく整理されていて便利である。LEMOINE, Bertrand, *La tour de Monsieur Eiffel*, Paris, 1989.
- (27) シャルル・ガルニエによって推進された住宅展示の意義を再確認したものに次がある。1889. *La Tour Eiffel et l'Exposition universelle*, Édition de la Réunion des Musées Nationaux, Paris, 1989. フランスの住宅政策の特質については、拙稿「ジョルジュ・ピコの労働者住宅論」『名古屋工業大学紀要』（45号、1994年、100-118頁）ですでに論じた。
- (28) 1900年万国博そのものについては、近年刊行された黄金時代を回顧する趣きの写真集をあげておこう。*L'Exposition universelle 1900*, préface de Jacques DUQUESNE, Paris, 1991. このとき産業都市リヨンを擁するローヌ県が主催したカンファランスの報告書が残されている。*L'Économie sociale et l'histoire du travail à Lyon*, Lyon, 1900.
- (29) 1937年万国博の技芸部門の報告書が次のタイトルのもとに刊行されている。*Arts et techniques dans la vie moderne* (Groupe III, Classes 10-13), Paris, 1937. その表紙にはR・デカルトの像が掲げられ、『方法叙説』の刊行からちょうど三百年を経たことを示している。
- (30) ヴァンセンヌ森で開催され、「パリ博覧会」時代を締めくくるにふさわしい賑わいを見せた1931年の植民地博については、小著ながら次が参考になる。HODEIR, Catherine & PIERRE, Michel, *L'Exposition coloniale*, 1991. その模様はE・オルセナの自伝的な小説からもうかがえる。ORSENNA, Erik, *L'Exposition coloniale*, Paris, 1988.
- (31) ウィーンまで旅した金鯨の運命や、1910年の関西府県連合共進会などについては、服部証太郎『明治の名古屋』の記述を参照した。本文で触れた鶴舞公園の一角にある市立図書館は、中央図書館としての機能をもっており、郷土史の書籍や市政関連の文書を保管している。1937年の汎太平洋博覧会など、名古屋で開かれた博覧会についての史料は、東区にある旧高裁の建物、いまの市政資料館に保存されている。